ユニット型特別養護老人ホームの職員による環境評価と空間に対する意識に関する研究

～仙台市Ｔホームにおける一年間にわたる継続調査から～

石井研究室　　山田　寿真

キーワード：ユニットケア，入居後施設評価法（POE），
SD 法，スタッフ，施設環境

1.　研究の背景と目的

2013 年 10 月 1 日現在、特別養護老人ホーム 6,754 施設のうちの 37.8%が個室ユニット型（一部含む）となっている。暮らしの環境を整える中で利用者の個性を尊重しケアをする「ユニットケア」においては、ケアとともにその空間環境のあり方も重要な要素である。そのため介護スタッフも、ケアの中でその空間の価値や意味を認識し、空間の果たす役割を理解することが求められる。

本研究の目的は、介護スタッフがユニット型施設の空間をどのようにとらえ、ケアの中で活用しているのか、また空間に対する意識をどのように持っているのかを、経時的な変化も踏まえて探っていこうとするものである。

具体的には入居後施設評価法（POE 評価）、施設空間の役割や意味、ケアと空間との関わりについてスタッフへのアンケート調査によって明らかにする。本稿では昨年度の調査に引き続き今年度に行った 2 回の調査を含めた全 3 回（1 年間）の調査結果を報告する。

2.　調査方法

2013 年に開設した特別養護老人ホームＴホーム（8 ユニット・計 80 名、仙台市）は、生活環境の充実と空間環境の重要性を意識して計画された。調査は介護スタッフにアンケート調査（2013 年 12 月，2014 年 5 月，10 月）を依頼し、回答を得た。同様の調査を 3 回にわたって行い、個々の回答分析を行うなかで、その変化もとらえる。

3.　調査対象者

1 回目のアンケート回答者は 25 人、2 回目は 30 人、3 回目は 21 人で、このうち 3 回すべてに回答があった回答者（以下、回答者Ａ群とする）は 13 人（男性 6 人、女性 7 人）である。本稿では、特に回答者Ａ群を対象としての 3 回の比較分析と、全回答者を対象としてのユニット型施設での勤務経験有無別の分析に焦点をあてる。

回答者のユニット型施設での勤務年数は、各回とも 7 割以上が「勤務経験なし、または 1 年未満」であった。

4.　結果と考察

4.1　ユニット内空間の使い勝手の評価

ユニット内空間の使用後評価によると、リビング、居室内洗面、脱衣・洗濯室、浴室に対する指摘が 3 回の調査を通して多くあげられた。特にリビングや浴室、脱衣・洗濯室では「狭い」と感じているスタッフが多く、居室内洗面では「汚れやすい」「鏡があるとよい」という点が問題としてあげられた。さらに浴室や脱衣・洗濯室では「手すりが少ない」という意見が多くあがった。3 回ともあげられた点はほぼ同様だったが、今後時間の経過によって新たな課題があがることも考えられる。

表 1　ユニット内の環境の評価

他のユニットの設えの様子が気になる		1回目(13)	2回目(13)	3回目(13)
1	まったく気にならない	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
2	あまり気にならない	2(15.4%)	2(15.4%)	0(0.0%)
3	少し気になる	6(46.2%)	4(30.8%)	7(53.8%)
4	とても気になる	5(38.5%)	7(53.8%)	6(46.2%)
合計		13(100.0%)	13(100.0%)	13(100.0%)
平均スコア		3.23	3.38	3.46

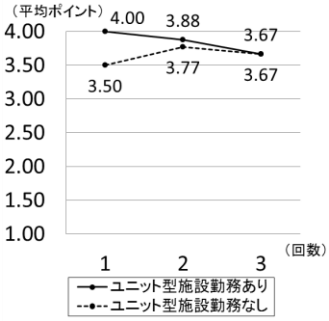

図 1　個別ケアへの空間の影響への実感（平均スコア）

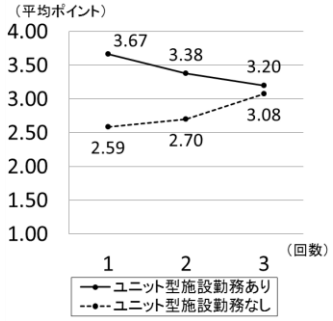

図 2　個々への空間の影響と意味の実感（平均スコア）

4.2　ユニット内の環境の評価

4.2.1　回答者Ａ群での分析

「他のユニットの設えの様子が気になるか」の評価に対して回答者Ａ群の 3 回の平均スコア（まったく気にならない 1～とても気になる 4 までの 4 段階評価平均）を見ると調査回数を重ねるごとにスコアが上昇し、「少し気になる」、または「とても気になる」と回答する割合が高くなった（表 1）。他のユニットを意識する余裕が出てきたこと、また自分のユニットとの違いが見えてきたことによると考えられる。

4.2.2　ユニット型施設勤務経験別での分析

「個別ケアの実践への空間のつくり方、あり方の影響」の評価に対しては、ユニット型勤務経験ありの平均スコア（まったく感じない 1～とても感じる 4 までの 4 段階評価平均）は調査回数を重ねるごとに下がり、勤務経験なしのスコアは上昇する傾向が見られた。空間のあり方がケアに影響していると実感しているスタッフが増える一方で、その意味を理解していながらもなかなか結果に反映されないと考えるユニット型勤務経験ありのスタッ

フもいる結果と推測される（図 1)。

「建物の空間のあり方がこの人にとって大きな意味を持っていると感じたケース（エピソード）があるか」では、ユニット型勤務経験ありの平均スコア（まったくない 1～とてもある 4 までの 4 段階評価平均）は調査 1 回目から 3 回目の間で 0.47 ポイント下がっており、勤務経験なしのスコアは 0.49 ポイント上がっていた（図 2)。先の結果と同様の理由が考えられる。具体的にあげられた事例としては、「認知症の方など落ち着ける空間や居場所があることで、問題行動の軽減などにもつながった」、「リビングにお気に入りの席ができ、居室から出てくることが増えコミュニケーションをとるようになった」、「いつもの場所と違う所にその方を座らせたら落ち着かず、表情も暗かった」などがあげられた。

4.3　労働環境としての施設環境の評価

4.3.1　回答者Ａ群での分析

回答者Ａ群のスタッフ自身に「施設内にくつろげる場所があるか」との質問に対しては、調査回数を重ねるたびに「ある」と回答する割合が高くなった（表 2)。「施設内で好きな場所があるか」の評価でも「ある」の割合が高くなり、「この施設の環境を誇りに思うか」では「誇りに思う」と回答する割合が高くなった。

4.3.2　ユニット型施設勤務経験別での分析

「施設内で好きな場所があるか」に対するユニット型勤務経験ありの平均スコア（好きな場所がない 1・好きな場所がある 2 の 2 段階評価平均）は調査 1 回目から 3 回目の間で 0.17 ポイント下がり、勤務経験なしのスコアは 0.33 ポイント上がった（図 3)。

「この施設の環境を誇りに思うか」の評価ではユニット型勤務経験ありの平均スコア（どちらかというと誇りに思わない 1・どちらかというと誇りに思う 2 の 2 段階評価平均）にはほとんど変化は見られないが、勤務経験なしのスコアは 0.40 ポイント上がっていた（図 4)。ユニット型勤務経験なしのスタッフが、時間とともに空間や環境に意識が高まり、またその価値を感じるように変化している様子が窺われる。

4.4　ユニット内の共用空間における感覚評価

4.4.1　回答者Ａ群での分析

ユニット内の共用空間の印象を対となる形容詞によるイメージ評価（SD 法、5 段階評価）で求めた。回答者Ａ群の 3 回の調査結果を見ると、「雑然とした」「狭い」「懐かしい」「古い」「家庭的な雰囲気」など生活感や時間の経過を感じさせるイメージが強くなっていた（図 5)。

4.4.2　ユニット型施設勤務経験別での分析

ユニット型勤務経験ありのユニット内の共用空間のイメージ評価の結果を見ると、調査回数を重ねるごとにより右側に評価が変化していることがわかった。一方、勤務経験なしのイメージ評価は調査回数を重ねるにつれて左側に変化する傾向が見られた（図 5 評価軸参照)。

5.　まとめ

施設の空間に対する意識、施設の環境に対する評価には時間の経過やユニット型施設での勤務経験が影響していることが明らかになった。1 回目の調査ではユニット型施設での勤務経験があるスタッフの方が空間に対する意識、評価が高かったが、2 回、3 回と調査を進めていくうちに勤務経験がないスタッフは利用者との関わりを通して空間がケアに与える影響や施設空間の役割について意識・理解していく様子が窺える結果となった。

今後さらなる時間の経過によりスタッフの空間に対する意識がどのように変化していくのか、スタッフ間の意識の違いがもたらす影響について明らかにしていきたい。

表 2　労働環境としての施設環境の評価

施設内にくつろげる場所がある		1回目(12)	2回目(13)	3回目(13)
1	ない	8(66.7%)	7(53.8%)	5(38.5%)
2	ある	4(33.3%)	6(46.2%)	8(61.5%)
合計		12(100.0%)	13(100.0%)	13(100.0%)
平均スコア		1.33	1.46	1.62

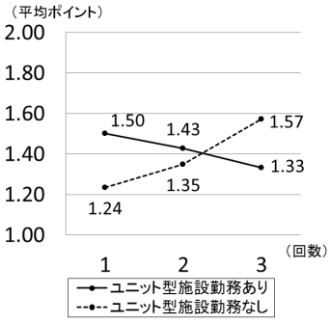

図 3　施設内で好きな場所があるかの平均スコア

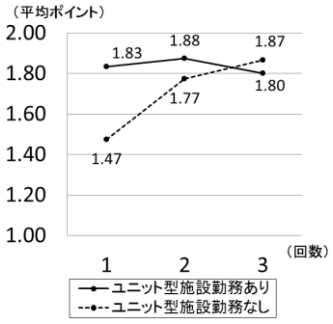

図 4　この施設の環境を誇りに思うかの平均スコア

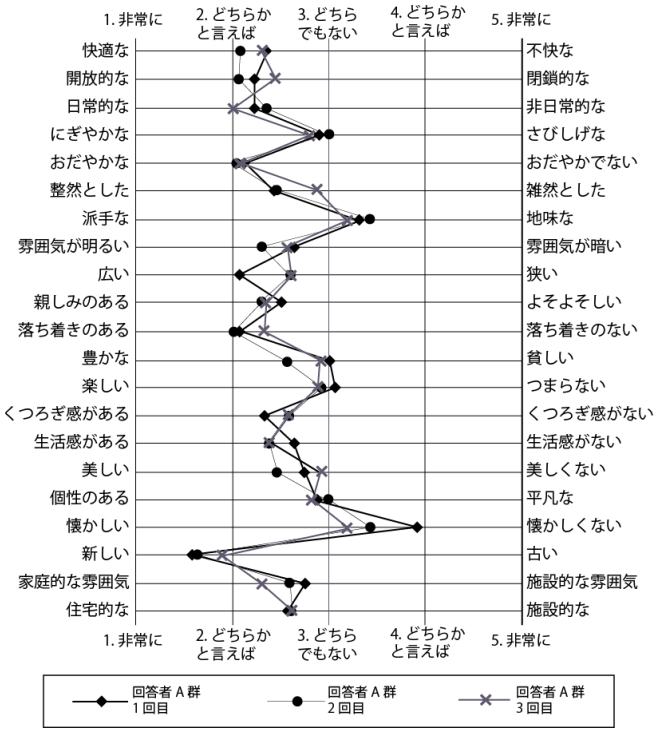

図 5　ユニット内共用空間のイメージ評価（回答者Ａ群での 3 回の比較）